

1
教育
地域

インスタで県の農産物をPR！ 知事への政策提言で学生が 「わっしょい大使」に

Vol. 14
February
2018

経済学部生が埼玉県の上田知事に政策提言したアイデアが採用され、県産農産物の魅力をPRする県公式インスタグラム「埼玉わっしょい」が12月21日に開設されました。提言を行った同学部今泉飛鳥講師のゼミ生5名はこの日、「埼玉わっしょい大使」に任命され、今後、県産農産物を食べられる飲食店の情報や料理などの写真を投稿し、情報を発信していきます。

11月8日に開催された、本学の学生が上田知事に政策提言を行う「知事と学生の意見交換会」で、5名が発表した「インスタグラム×若者×県産農林産物」のアイデアが今回の取り組みとして採用。大学生の8割が県産農林産物に「興味がない」とするアンケートを背景に、SNSが若者の消費行動を促しているとして、インスタグラムを使ったPRが効果的だと訴えました。

2010年に始まった意見交換会は、若者の感性を県政に活かすとともに、大学を生きる学習の場とすることを目的に今年で8回目。



今回は、経済学部と工学部から5つのゼミが参加し、公共交通の利用促進や子育て支援、都市公園の再整備など県が抱える課題をゼミごとに1つ選び、提案しました。これまでに提案されたアイデアの中で、公園の散歩コースへの企業協賛による消費カロリー表示機設置や、大学生によるフリーペーパー発行などが実現しています。

- 1 早速投稿したインスタグラムの写真を上田知事に見せる学生
- 2 知事に政策提言する学生たち
- 3 学生が運営する県公式インスタグラム「埼玉わっしょい」



2
教育
地域

浦和地域の魅力づくりを学生が提案 埼玉大学 × アトレ浦和の連携授業

地域が抱える課題解決や学生のキャリア形成などを目的に、アトレ浦和との連携講義「課題解決型インターンシップ(全8回)」を4学期制の第1と第3タームにそれぞれ開講しました。

このインターンシップは、「浦和地域の魅力づくり」をテーマに、学生自らが企画した地域の課題について取材やフィールドワークなどを実施。その成果を記事にまとめ、アトレ浦和の情報誌UlaLaに掲載するもので、地元学生が浦和の魅力を再発見し地域について考えるきっかけにしてもらおうと単位制の授業として今年度より開講しました。

受講者は教養学部や工学部などの1～4年生で、最終講義にはアトレ関係者の前で成果発表を行いました。講義後、学生は「地域について真剣に考え、多くのことを学んだ」「さまざまなことを経験でき、充実した時間だった」と話

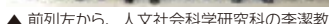


- 1 学生の提案が掲載されたアトレ浦和の情報誌UlaLa
- 2 プレゼンテーションする学生たち

していました。成果記事が掲載されたUlaLaは、同社ウェブサイトのほか、店舗内で配布されます。同様の連携講義は来年度も開講する予定です。

10 研究 5名の教員に学長奨励賞を授与 研究活動に顕著な功績

本学において12月5日、平成29年度学長表彰の表彰式を開催しました。学長表彰は職務に顕著な功績や、社会的な功績があった教職員を表彰するもので、このたびの表彰式では、教育・研究活動に顕著な功績があった5名の教員に「学長奨励賞(教育・研究)」が授与されました。山口宏樹学長はあいさつで「皆さんの今後益々のご活躍が大学の発展に繋がっていきます」と激励。続いて、受賞者を代表してあいさつした理工学研究科の斎藤雅一教授は、研究支援者への謝辞を述べ「この受賞を機により一層研究活動に励みたい」と決意を新たにしました。



▲ 前列左から、人文社会科学研究所の李潔教授、理工学研究科の斎藤雅一教授、山口学長、理工学研究科の吉川洋史准教授、研究機構企画推進室の豊田正嗣准教授、同推進室のRichard Neal Bez 准教授

12 国際 「自ら発信する大切さ痛感」 ノーベル賞関連イベント参加し帰国報告

12月に開催されたノーベル賞授賞式に合わせ、スウェーデンで行われたストックホルム国際青年科学セミナーに参加した大学院理工学研究科博士前期課程2年の大塚美緒さんが1月24日、本学で帰国報告会を開きました。セミナーには世界中の18～24歳の若手研究者25名が参加。大塚さんは日本から派遣する2名のうちの1名に選ばれました。地元高校生への研究発表や参加者間で議論を交わし、大塚さんは、他国の参加者の能動的な姿勢と発信力に感銘を受け、「自ら発信することの大切さを痛感した。教育を受ける機会を大切にすると同時に、普段から発信することも意識したい」と決意を語りました。



▲ スウェーデンでの体験を発表する大学院生の大塚さん

14 国際 グローバルキャンパスの集いを開催 270名が参加し留学生と交流

留学生と日本人学生との交流や、本学が実施する国際教育プログラムを紹介することを目的に12月13日、「埼玉大学グローバルキャンパスの集い」を開催しました。留学生や日本人学生、教職員など約270名が参加。山口宏樹学長と全学留学生会会長の挨拶の後、本学の国際教育プログラムに参加している学生が、各プログラムの紹介と海外での経験を発表しました。後半には、留学生による母国の民族衣装やダンス、歌に続いて、学生サークルによる迫力ある和太鼓やけん玉の演技が披露されました。演技終了後には、感想を学生同士で歓談するなど、有意義な交流が図られました。



▲ ダンスを披露するミャンマーの留学生たち

16 地域 埼京線沿線の地域活性化に貢献 JR東日本大宮支社との連携事業

JR東日本大宮支社と本学は2015年8月に、埼京線沿線の活性化、次世代の地域づくりを担う人材育成などを目的に連携協定を締結しています。継続的な取り組みとして、2015年から、地域を盛り上げようと同支社とコラボしたポスターをJR大宮駅のデジタルサイネージや埼京線各駅で掲示しています。また、学生が埼京線沿線のまちづくりを提案する「課題解決型インターンシップ」も2016年から継続的に開講。更に新たな連携として、

11 国際 アフリカ大陸初となる交流協定を締結 山口学長がモハメド5世大学を訪問

山口宏樹学長と教養学部の市橋秀夫学部長は10月31日から3日間、モロッコのラバトを訪問し、モハメド5世大学との大学間交流協定書に署名しました。アフリカ大陸の大学と協定を結ぶのは、今回が初。モハメド5世大学のAmzazi学長らと今後の具体的な交流について意見交換を行い、その後ラバト国際大学での意見交換やモロッコ高等教育省長官と会談しました。さらに国際協力機構(JICA)モロッコ事務所を訪問し、モハメド5世大学との実質的な交流を行う上でのJICAのスキームの適用可能性などについて意見交換を行いました。



▲ モハメド5世大学のAmzazi学長(左)と山口学長の会談

13 国際 JICA研修でモンゴル教育関係者を受け入れ カリキュラム・マネジメント推進に協力

国際協力機構(JICA)の研修で、10月30日から4週間来日していたモンゴル国の数学・理科教育関係者18名が、本学や近隣の小・中学校を訪れ、カリキュラム・マネジメントに関する講義を受講するほか、授業参観や研究協議などを実施しました。研修は、JICAの研修員受入事業である国別研修「カリキュラム・マネジメント・サイクル運営強化研修」の一環として実施され、本学教員が技術協力などを行っています。本研修では、各研修員の所属機関におけるカリキュラム・マネジメント・サイクルの実現と普及を目指して、「学校グランドデザイン」のほか、算数・数学と理科の年間指導計画などを成果品として作成しました。



▲ 本学附属中学校の理科授業参観

15 地域 「カルソニックカンセイ奨学金」を設立 理系学生を対象とした人材育成の支援

自動車部品大手のカルソニックカンセイ株式会社(さいたま市北区)から支援を受け、理系学生を対象とした「カルソニックカンセイ奨学金」を設立しました。理学部と工学部、大学院理工学研究科博士前期課程の学生のうち4名を選び、原則として卒業・修了まで継続して、1名当たり年間30万円を給付します。同社で10月18日、柿沢誠一副社長と山口宏樹学長が出席し、設立申請書受領、感謝状贈呈式を開催。山口学長は「自動車産業が変革する中、どのような人材を育成すべきか広い意味で連携し対応していきたい」と述べ、柿沢副社長は、「この奨学金により、幅広い分野で活躍する人材を育てていただきたい」と期待を寄せました。



▲ 山口学長(左)から感謝状を受け取る柿沢副社長

2017年9月には、学生が考案した県産食材を使ったお弁当販売、11月には沿線保育園で、親子を対象とした食育ワークショップを開き、学生が食の大切さを伝える紙人形劇や、県産野菜を使った食育体験イベントに取り組むなど、年々連携を深めています。



▲ 食育イベントで県産食材を使い餃子をつくる親子